

本日はイエス様が弟子達を宣教に遣わした場面に突如バプテスマのヨハネの殉教が記されている箇所。なぜマルコがこの箇所にバプテスマのヨハネの殉教のことを記したのか。その理由を学び適用したい。

I. もう一步のヘロデ (14-16)

ここでのヘロデ王とはヘロデ・アンテパスの事でイエス様が降誕され、2歳以下の男の子を一人残らず殺させたヘロデ大王と彼の4番目の妻の間に生まれた息子。ヘロデは父ヘロデ大王によって譲り受けたガリラヤとペレヤの領主であった。ヘロデはイエス様が成された奇跡の噂を聞いていたはず。ヘロデはバプテスマのヨハネが正しい人であるとは分かっていたながらも彼を殺した。ヘロデは自分が首をはねたヨハネがよみがえったと言ひ、無罪の人を殺した罪悪感に苦しんでいたのが分かる。ヨハネはイエス様の道備えをする先駆者として人々が悔い改め神に心を向けるように宣べ伝えた人。(17-19)

ヘロデは、父ヘロデ大王と2番目の妻の間の子アリストブロスの娘であり、自分の異母兄弟ピリポの妻であるヘロディアと恋仲に陥り、自分の妻と離婚し、彼女との結婚を強行した。つまり、ヘロデにとってヘロディアは姪であり、兄弟の妻である義妹と結婚した。ヘロディアは娘サロメを連れてヘロデの元で暮らした。そのように至ったのには裏話がある。ヘロデの異母兄弟のピリポが父ヘロデ大王から譲り受けたヨルダン東岸とガリラヤ北部を領地としてもっていたが、そこは当時のローマ帝国にとって最大の敵国であったパルティアとの国境にあり、すでに何度も侵入され領有権を脅かされていた。そのため、野心家であったヘロディアは自分と娘の将来が心配になり、夫ピリポに見切りをつけ、より有望な義兄弟ヘロデと再婚した。このことでかなりの財産が動き、それがヘロデの羽振りの良さに表れている。

「あなたの兄弟の妻の裸をあらわにしてはならない。」(レビ記 18:16) とあるように彼らは律法違反を犯していた。そのため、ヨハネはヘロデに「兄弟の妻を自分のものにするのは間違っている」と言い続けた。ヘロディアは自分の政略結婚の大義名分を奪う発言に憤りを感じ、ヘロデにヨハネを殺害するように相談。しかしヘロデは群衆を恐れ、殺害するのではなく投獄するのみに留めていた。またヘロデはヘロディアに圧力をかけられながらも彼女とは少し異なった思いをヨハネとその神の教えに抱いていた。

「それは、ヨハネが正しい聖なる人だと知っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていたからである。」(20) ヨハネを義人と認めていたヘロデは厳しい批判をしてくる彼を恐れ、当惑しながらも、彼の語る神の言葉を喜んで聞いていたとある。ヘロデは矛盾していて不思議な男だと感じる。しかしこれは私たち人間の姿ではないか？神に対する尊敬や興味は持つが、深入りはせずに自分の都合の良いように神の言葉を解釈し、適用し、その言葉に安堵しようとするだけで、自分の中にある罪や悪について指摘されると心の中が不安になったり、逆にそんなこと言われる筋合いはないと怒り、自分は悪くないと自分を正当化し、悔い改めることをしないような者ではないか。ヘロデはもう一步で悔い改め、救いを受ける可能性があったと思われる。しかし彼は妻の思いを優先し悔い改めを拒んだ。

私たちはヘロデのように、神についてもっと聞き、知りたい、さらに真の救いを受けたいと思っても、妻や恋人、家族、友人など大切な人の考えの方が勝ってはいないか。正しい道と分かっているのに流され、真理から離れてしまう。私たちはご聖霊の働きによって救いに導き入れられた者。ただ主のあわれみ。まだ救いの恵みに預かっていない私たちの愛する人たちにご聖霊が働かれ、主の最善の時に主を信じ悔い改めに導かれることを信じて祈り続けましょう。

ヘロデは、ヨハネに何度も罪を指摘され、悔い改める機会は何度もあったにも関わらず悔い改めることをしなかった。その彼のどっちつかずの態度の結果、彼は重大な罪を犯すことになる。

II. 貪欲なヘロディア (21-24)

ヘロデは自分の誕生日のために権力者達を自分の所に招いて祝宴を開いた。その時ヘロディアの娘が来て踊りを踊り、ヘロデも列席の人達も喜んだ。機嫌を良くしたヘロデは少女になんでも欲しい物を求めるように言った。望むなら私の国の半分でも与えろと。少女は母ヘロディアに何を願ったら良いかを尋ね、母はヨハネの首と言った。ここでヘロディアの心の中にずっと持ち続けていた憎しみがあらわにされる。ヘロディアは自分の夫の兄弟に浮気をし、夫を捨て権力と富を持っている

ヘロデに乗りかえた貪欲な人。彼女はその罪を悔い改めよと言うヨハネに憎しみを抱き続けていた。貪欲な人というのは自分の悪い所を指摘する人を憎む。憎しみは隠そうとしても隠し切ることはできず、いつか表面に顕れる。そして隙をうかがい、相手の弱みを握ろうとしたり、いじめたりする。私たちのうちにも同じ思いはないか？自分の悪い所や欠点を指摘された時にすぐに怒ったり、心の中に溜め込んで後で思いを爆発させてしまいやすい私たちですが、素直に聞き、自分の足りない部分を認め、変えて頂けるように主により頼む者とされてまいりましょう。

III. バプテスマのヨハネの宣教と死（25-29）

そこで少女はヘロデの所に急いで行き、今すぐにヨハネの首を盆に載せてほしいと言った。けれどもヘロデはその求めに「非常に心を痛めた」（原語：ペリリュポス。この語は他にゲッセマネの祈りの時にイエス様が自分の心境を語った言葉で「悲しみのあまり」と訳され、深い悲しみやうれいを表す言葉）とあり心底苦しんでいたことが分かる。しかしヘロデは有力者の前で少女に誓ったため、自分が間違っていると分かりながら、自分の面目を気にし、他人の目を恐れるために少女の要求に応じた。ヘロデがヨハネの首を持って来るように命じたとはローマ帝国から直接任せられている領主としての権威に基づく絶対的な命令を下したということ。貪欲な人が高い地位に就くと恐ろしい。貪欲な人は権力を欲しがる。それは人を支配し、自分の欲望を満たすため。

ヘロデはすぐに護衛兵を遣わしてヨハネの首を持って来るように命令した。護衛兵はヨハネの首をはね、その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。無実の人の首がはねられ、盆に載せられ、祝宴の場に運ばれるというのは異常なこと。

ヨハネの言葉は何も書かれておらず、正しい人の無言の死。ヨハネは、主に従う正しい道を権力がある人達の前でも、苦難が襲っても曲げることはなかった。なぜそのようにできたのか？それは神に従う事に迫害が伴う事を知っており、命も奪われる可能性もある事をわきまえ覚悟していたから。私たちもイエス様に従う者として同じ事が求められる。

なぜマルコはヨハネの殉教の記事をイエス様が弟子達を宣教に遣わした場面に入れたのか？それは人々を悔い改めに導く福音を宣べ伝える人には人々から嫌われ、憎まれ、状況次第では命も落とす事があるため。キリスト者である私たちはどんな状況でも主に従い続ける者でありたい。

キリスト者がどんな状況でも神に従うのはなぜか？それは神に背き滅びるに過ぎなかった私たちを父なる神は見捨てる事なく愛し続け、主の十字架、復活、再臨の希望の恵みを私たちにお与えくださったから。

私たちもいつも主の恵みに生き、主を見上げ心備えをしておくことが大切。ヘロデとヘロディアがヨハネにしたように私たちを嫌い憎みいじめたりする人が学校、職場、家族や友人の中から出て来るかもしれない。けれども、私たちは「世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」（ヨハネ 16:33）と言われるイエス様に従っているのですから、どんなことがあっても立ち続けることができ、またさらに主の愛で私たちも迫害する人達をも愛し、何としても神の愛を知り、救われてほしいという思いが湧き上がってくる。私たちは神に従うクリスチャンであることで、愛する家族、友人、知人から嫌われることがあるかもしれませんが、私たちは神の愛を頂き、愛を示しつつ直接福音を語る事が難しくても、主の光、香りを放つ者として愛する人々に仕え、主の時に私たちを通し暗闇に光が照らされ悔い改め、救いに導かれる事を祈り続けてまいりましょう。また私たちは何をも恐れることなく、永遠に神の愛の中で生きる者とされている事を覚え、主の御名を崇め歩ませて頂きましょう。（ローマ8:35-39）